

きれいな空気を吸う権利

高知 五年 一希

十月二十三日、人権総合の時間があった。『権利の熱気球』という勉強で、十個の権利を捨てていく勉強だった。

授業の最後にきたときに、先生が、

「一つだけ権利を残しなさい。」

と言った。ぼくは、まだ五つの権利を残していた。残っていたのは、「自由にできるお金をもらう権利」と、「みんなと異なっていることを認められる権利」と、「毎日十分な食べ物ときれいな水を得る権利」と、「正直な意見を言い、それを聞いてもらう権利」と、「きれいな空気をすう権利」だった。その中で、ぼくが最後に残そうと思ったのは、「きれいな空気をすう権利」だった。これはすぐに決めた。ぼくのぜんそくのことか頭にうかんだからだ。

ぼくは、三才のころからぜんそくで、入院も何回もした。そのたびにお父さんとお母さんもすごく心配して、こうたいで病院に来てくれた。このごろは、前とくらべたらぜんそくが出るのは少なくなっただけ、ときどきしんどくなることもある。そんなときは、学校を休むこともある。

ぼくは、ぜんそくになってからずっと薬をのんでいる。毎日、朝と夜、のんでいる。薬は二種類あって、いつものまなければいけないのと、しんどくなったときにのむのと、二種類ある。のむたびに、ぼくは、（いつまでのなまいかんのかなあ。）と思う。

薬のことで、ぼくが困っていることはふたつある。一つ目は、歯のことだ。そのことで、ぼくはお父さんに聞いたことがある。

「なんでぼくの歯はガタガタなが？」

と聞くと、お父さんは、

「薬、のみゆうきよ。」

と言った。ぼくは、最初は、ぜんそくの薬と歯が関係あるとは信じられなかったけど、今は、関係あるのだろうなあと思っている。ぜんそくじゃない友だちの歯とくらべたら、ぼくの歯は、やっぱりぜんそくちがうからだ。友だちの歯はきれいなのに、ぼくの歯は、一本だけきれいながあるだけで、あとは全部ガタガタだ。

もう一つ困っていることは、体のことだ。ぼくはやせていて太らないし、背がのびない。おとなの人から、

「三年生かね？」

と言われたこともある。ぼくは腹が立って、

「五年生！」

と言いつ返したけど、やっぱりいやだった。

それから、ぼくは運動をしてもすぐつかれてしまう。持久走のときでも、三百メートルぐらい走っただけですぐつかれて走れなくなる。もうすぐ持久走も始まるのに心配だ。

薬と同じように、毎日していることは、きゆうにゆうだ。毎晩、三十分しなければいけない。めんどくさくて、ときどき時間をごまかすこともあるけど、見つかったらお父さんにおこられる。ぜんそくじゃなかったら、こんなこともないのになあと、ぼくはいつも思う。

ぼくは、最後に残した権利のカードの裏に、「きれいな空気をすわないと、ぼくのぜんそくがでたり、体にも悪いから」と書いた。ぼくは、それを先生にわたした。みんながカードをわたしたら、先生が順番にみんなの書いたのを読み出した。ほとんどの人が、「愛し、愛される権利」だった。

最後に、ぼくの残した権利が発表されることになった。先生が、

「一希が選んだのは、どれだと思いますか。」

と聞いた。ほとんどの人が手を上げていた。先生が、

「同級生の修造。」

と言った。修造君は、

「はい。いじめられたりしない権利だと思います。」

と言った。ぼくは、

（ちがっているけど、いじめられたりしない権利も、一回残そうと考
えたけどやめた権利だった。）

と思った。先生は、

「ちがいます。」

と言って、「きれいな空気をすう権利」のところにも、ぼくの名前カ
ードを持っていった。それから、先生は、ぼくが書いた理由を読み出
した。読んでいるとき、先生の声が変わった。先生を見ると、先生は泣
いていた。ぼくは、うそ泣きじゃないかと思って、ずっと見ていたら、
先生は読みながら本当に泣いていた。ぼくは、先生が泣くのをはじめ
て見た。

授業が終わって、五年生の和佳ちゃんと真緒ちゃんに、

「先生、どうして泣いたがやろう。」

と聞いてみたら、

「一希君の理由に感動したがじゃないが？」

と言った。ぼくは、前、日記にぜんそくのことや歯のことや薬のこと
を書いたときに、先生がいい日記やと言っていたことを思い出した。
ぼくは、

（そのことと関係あるかもしれん。）

と思った。



(指導 坂田次男)